

「地域をつくる」を考える

：第2回社会福祉シンポジウム「福祉をひらく 地域をつくる
—— わたしたちにできることは？ ——」を開催して

浮ヶ谷 幸 代

はじめに

相模女子大学人間社会学では、2016年11月3日、本学マーガレット本館で社会福祉シンポジウム「福祉をひらく 地域をつくる——わたしたちにできることは？——」を開催した。

シンポジウム開催の契機となったのは、人間社会学部で2016年度から社会福祉士課程^(注1)が導入されたことによる。これまでの2年間、人間社会学部内に社会福祉課程を導入するために、社会マネジメント学科と人間心理学科の教員により構成された社会福祉検討委員会を開催してきた。そして2016年4月から社会福祉課程の対象となる1年生が入学するにあたり、先の委員会も社会福祉運営委員会と名称を改め、課程の実質的な運営に取り組んでいる。

学部内の取り組みと並行して、社会福祉課程の新たな設置を大学周辺の地域に周知するとともに地域密着型の社会福祉を目指すために、地域との連携を深めるシンポジウムを毎年開催することになった。昨年度開催した第1回シンポジウム「福祉をひらく 地域をつなぐ」に引き続き、本シンポジウムでは「福祉をひらく 地域をつくる」と題し、「たがいに支え合う地域社会をつくるためにわたしたちに何ができるか」という問いのもと、大学と地域住民そして社会福祉関連の事業者や専門家との意見交換を行った。

本シンポジウムのメインテーマに「福祉をひらく」と「地域をつくる」という二つのキーワードが使われている。「福祉をひらく」は、近年福祉学の流れの中で、社会福祉が対象とするのは「貧困者」「失業者」「障がい者」といった、特定のカテゴリー

の人たちから「すべての人たち（わたしたち）」へと広げる方向性が目指されている。このことをイメージして命名している。このことの意味は、上述の人たちが抱える問題を矮小化したり、周縁化したりすることではない。むしろ、「生きづらさを抱える」という視点を導入すれば、だれもが抱える共通の課題が見えてくるのではないかと考えたことによる。いいかえれば、これまでの福祉の概念や福祉の対象者に対するイメージを転換していくことを意味している。転換する契機となるのは、「ひとごと」ではない「じぶんごと」として捉える切り口であると考ええる。

シンポジウムでの報告は、「高齢者福祉」「障害者福祉」「児童福祉」という分野から報告してもらったが、それぞれの報告は、そうしたカテゴリー分けに反して、従来の福祉の前提を覆すような内容、まさに「福祉をひらく」実践を示す内容となっている。

本稿では、シンポジウムのキーワードのうち「地域をつくる」に焦点を当てて議論を展開していく。まず、シンポジウムで「地域をつくる」というテーマを設定した経緯について述べる。次に、シンポジウムの前半で行われた登壇者の報告と筆者の考察を交えて記述する。そして後半にワールドカフェ方式での総合ディスカッションの内容について報告する。最後に、人文社会科学における地域論を参照しながら、現代社会において「地域」に着目し、シンポジウムを開催する意義について考察を試みたい。

1 「地域をつくる」

シンポジウムのキーワードの一つ「地域をつくる」という言葉は、これまで地域福祉の分野で取り組まれてきた。今、再びコンセプトを変えて、医療福祉の現場で頻繁に使われる言葉となっている。その背景は、世界的にも人跡未踏の超高齢社会を迎えるにあたって、近年、厚生労働省が病院医療から在宅医療へと打ち出してきたことが一因といえる。在宅医療を支えるのが地域医療であり、医療福祉の対象がサービスを受ける個人だけではなく、「地域」全般になったということの意味する。

そこで、地域包括ケアシステムという国の政策が提示されたが、このシステムの軸となるのが「自助」「互助」「共助」「公助」という4つの概念である（厚生労働省HP）。ところが、わたしたちのほとんどは「公助」の部分にかかわる専門家主導の「地域ケアシステム」をイメージするのではないだろうか。「地域づくり」が専門家中心となると、わたしたちは専門家に依存したり専門家にすべて委ねたりしがちであり、地域が抱える課題に対して「ひとごと」になってしまうのである。これからは、地域住民であるわたしたちの視点が重要な鍵となると考える。このことが、シンポジウム

のサブタイトルを「わたしたちにできることは？」とした理由なのである。

さて、家族の絆や地域のつながりが弱体化しているといわれている現代社会で、「地域」というものが果たしてどのくらい機能しているのだろうか。「地域が機能する」という言葉が意味するところは、地域に暮らす人たちの関係性が機能していると言い換えることができる。先の地域包括ケアシステムで指摘した4つの機能のうち、特にインフォーマルな助け合いである「互助」に注目してみたい。

わたしたち自身が暮らす近所付き合いのことを思い浮かべてみよう。「互助」とは、例えば朝晩の挨拶をはじめとして、味噌や醤油の貸し借り、夕食のおかずのおすそ分け、子どもの預け合いなど、何気ない日常の暮らしを地域で営んでいたなかに自然と埋め込まれていた。些細であるけれども大事な関係性のことである。それだけではなく、広義にみれば、「互助」は地域の暮らしの中で必要となる近隣区域での助け合いも含まれる。ゴミ当番や地区の大掃除など自治会レベルでの助け合い、また公園の花壇の手入れなどの緑化活動、そして子どもと遊んだり、子どもの勉強の手伝いや絵本の読み聞かせなど、ボランティア活動や子育て支援活動もあてはまるだろう。

また、「地域」をつくるインフォーマルな活動は、「互助」以外にも見出すことができる。卓球やゲートボール、マージャン、カラオケ、手芸等の共通の趣味をもつ人たちの余暇活動、その余暇活動を通してのネットワークづくりがある。余暇活動を展開する場所として、家庭でもなく職場でもなく「サードプレイス（第三の場所）」^(注2)といわれる居場所での活動がある（オルデンバーグ 2013）。これといった目的をもたなくてもただそこに集まり、お茶やコーヒーを飲みながらおしゃべりをし、ひとときを過ごす場所である。これらのインフォーマルでのさまざまな活動が「地域」をつくるといえるだろう。

こうしてみると、多くの人はインフォーマルな活動に参加していることに思い当たるのではないだろうか。このような「互助」による助け合いや余暇活動、居場所づくりによる人と人との「ネットワーク」が「地域」を機能させる要素となると考える。

いずれにしても、「地域」を構想する際に重要なのは、人と人との関係性であることに間違いなさそうである。「地域」における社会関係が機能していくために、「地域」の社会関係が弱体化しているならば、その関係性を再びつくるか、もしくは価値づける必要があると考える。

「地域をつくる」人とは、もちろん医療福祉の専門家でもあり、行政関係者も含まれる。だが、基本的にはわたしたち一人ひとりが「地域をつくる」当事者なのだとはいえる。そこで、シンポジウムのタイトルを「地域をつくる」としたのである。シンポ

ジウムでは参加者とともに3人の登壇者による話題提供を通して、「地域をつくるためにわたしたちにできることはなにか」ということを、「ひとごと」ではなく「じぶんごと」として、考えることを目指したのである。

2 シンポジウムでの報告とディスカッション

ここではシンポジウムの報告内容と参加者同士のディスカッションについて紹介していく。登壇者の菅原健介氏の〈ぐるんとびー駒寄〉と高田大志氏の浦河ひがし町診療所は筆者の調査先であり、また曾我幸央氏の相模原児童ホームは筆者のゼミ生とのボランティア活動（後述する）の協働先である。したがって、以下の内容は、調査や訪問の際に得た知見を交えたり、学術的な見解を参照しながら、筆者自身の考察を加えてまとめている。

(1) 「たて×よこ×ななめの関係でつながる地域：藤沢市UR住宅内小規模多機能ホーム〈ぐるんとびー〉の実践から（菅原健介氏）」

菅原氏は、2015年7月に藤沢市にあるUR（独立行政法人都市再生機構）の集合住宅の一角に開所した小規模多機能ホーム〈ぐるんとびー駒寄〉（以下〈ぐるんとびー〉）の代表者である。これまで、菅原氏は藤沢市内の小規模多機能ホーム〈絆〉で介護ケアに取り組んでいたが、新たな場としての集合住宅に着目し、団地内コミュニティケアを実践するためにUR住宅に開設した。高齢者家庭や独居高齢者の増加、新旧住民の間の溝など、住民間の関係性の変容により、隣近所との付き合いや交流が弱体化していく中で、菅原氏は集合団地を一つの町として捉え、再び地域の絆を取り戻そうと構想している。

菅原氏の発想は、施設名の〈ぐるんとびー〉に由来がある。彼は中学・高校とデンマークで暮らした経験があり、その際に学んだ教育者のニコライ・F・グルントヴィの思想^(注3)に影響を受けている。グルントヴィは「近代デンマーク精神の父」と呼ばれ、その思想は「自発的に自分自身に光をあて、自分の才能、能力に目覚め、社会に貢献する自分を育てあげること」（野村 2010：171-172）であり、「楽しく『生きる』ための教育」を実践することである。菅原氏は、グルントヴィという音に似せて「地域を“ぐるんと”結び」、自身の子どもを始めて地域の子どもたちを巻き込んだ「“ぐるんと”子ども食堂」という表現を使用している。〈ぐるんとびー〉という名称には豊かな意味が付与されているのである。

報告で示されたのは、かつて地域のフラダンス教室に通っていた利用者が認知症ゆえに教室を諦めていたが、フラダンスの仲間の輪の中に再び戻っていった話、かつて地域の俳句の会に通っていた利用者がスタッフ同伴で会に通い始め、仲間と俳句を詠む楽しみを再び取り戻した話である。また、かつて車いす生活だった世界水泳の経験者である利用者をプールに連れていき、泳ぐ喜びを再び味わってもらうことで、利用者が次第に歩行の力を取り戻し、ついには娘との旅行を実現できた話などである（発表スライド；神保 2016）。ここにグルントヴィの精神「生活が楽しいから目が輝く！元気になる！！」の実践例を見ることができる。それは高齢者の「生きることの意味」を見出すことにもつながっているのである。

また、デイサービスの一環として、芸術療法（絵画や工作）やスポーツ（卓球）、寺子屋（子ども塾）など、高齢者や子どもたちの交流の事例が提示された（発表スライド）。2016年8月に〈ぐるんとびー〉を訪れたとき、菅原氏の次男が迎えてくれ、施設のオリエンテーションをしてくれた。また、部屋の隅で白髪の上品な女性がタオルをたたんでいた。この高齢者は利用者ではなく、〈ぐるんとびー〉と同階のエレベーターを隔てた部屋の住人である。女性によれば、頼まれたわけでもないのに、ときどき〈ぐるんとびー〉に来ては勝手にタオルたたみをしているというのだ。

さらに、菅原氏の頭の中には、UR住宅をコミュニティ・タウンに変えていく仕掛けが次々と浮かんでいる。例えば、空き家問題を抱えるUR住宅をシェアハウスとして利用する、団地内に食堂をつくり利用し易い価格で提供する、子育て世代のお母さんが働きながら子どものために利用する等の小規模多機能施設の開設である（神保 2016）。なかでもユニークな実践は、一人暮らしの高齢者に夕食作りのサービスを提供するシングルマザーの活用である。夕食の材料費は高齢者負担で、高齢者とシングルマザーとその子どもと一緒に食卓を囲む、という仕組みである。高齢者の孤食の問題と働く女性の経済的負担を軽減するためのアイデアである。高齢者にとってその子どもが孫のような存在となり、ある高齢者は子どもが小学校に入学する際にランドセルを贈ったという。サービスの供給者と受給者という役割関係以上のつながりが生まれている。

〈ぐるんとびー〉では、子どもたちだけでなく、若者世代や子育て世代、高齢者世代のボランティアなど、多世代、異業種を“ぐるんと”巻き込み、地域の人たちによる助け合う関係性を構築することを目指している。

(2)「専門家が変われれば地域が変わる：浦河ひがし町診療所の多面的な取り組みから」 (高田大志氏)

高田氏は、2014年3月まで北海道の浦河赤十字病院（以後、浦河日赤）のソーシャルワーカーとして勤務していた。数年前、浦河日赤では経営上の理由で精神科病棟の廃止という問題を抱えていたが、紆余曲折の末、病棟を廃止した。それと前後して、高田氏は精神科医や精神科看護師、ソーシャルワーカーとともに、浦河ひがし町診療所（以後診療所）を立ち上げている。精神科病棟の廃止と診療所の立ち上げの経緯については、別稿で論じているので参照されたい（浮ヶ谷 2017）。

診療所のスタッフは、長期入院を前提とする日本の精神医療の特殊性^(注4)のなかで、患者を転院させずに、地域で暮らすためのサポート体制を模索する道を選択した。ただし、長期入院患者の退院をめぐる困難は並大抵のことではない。このことは、高田氏が別稿にて紹介しているので参照されたい（高田 2017）。

診療所の活動には、診療所の内と外で取り組む活動がある。なかでも、外の活動として、精神障がいの当事者（以後メンバー）とともにスタッフが地域に出ていくことに力を入れている。食育につながる活動として田植えや稲刈りなど、地域の子どもたちやその親を巻き込んだ田んぼの活動がある。また、近隣地域の障がい者施設との芸術活動の交流や、地域の寺院との協働で〈カフェデモンク・えりも〉^(注5)を開催している。他方で、診療所内の活動としてデイケアだけでなくナイトケアの活動がある。一人暮らしのメンバーにとっては、夕食後から寝るまでの時間、だれとも言葉を交わさず、これといって趣味を持たない人にとってはいたたまれない時間となり、幻聴や体調不良といった病気の症状に悩まされることが多い。そこで、ナイトケアでは体を使ったプログラムやバランスのとれた夕食を提供することで当事者の安心と安眠を確保している（浮ヶ谷 2015：20）。

診療所の精神は、入院時に従っていた既成のプログラムからメンバーたちが脱却し、メンバー自身がプログラムを企画し、実践していけるように支援することである。「自分の生き方は自分で考える」という基本姿勢を軸に、プログラムの企画段階からメンバーが中心となり、自分たちでやりたいことを出し合い、経費を算段する。地元のお店（ケータリング）や施設（温泉施設、カラオケ店）を使用する場合、自分たちで交渉する。診療所の設立当初、デ・ナ・イト・ケアに待ちの姿勢で参加していたメンバーたちは、いまや自分たちのデ・ナ・イト・ケアであるという自覚が芽生えている。

これらの試みは、入院型治療を前提とする精神医療では実現不可能な取り組みであった。しかし、地域で暮らすことを選択したメンバーにとって生活上欠かせない暮

らしの知恵であり、患者自身が脱施設化を目指す際の基盤となる精神である。

ところが、メンバーの脱施設化への道が少しずつ開けてきている一方、支援者側（スタッフ）のとるべき態度、考え方はどう変化しているのだろうか。そこに着目して、高田氏は本報告で「支援者の脱施設化」を扱ったのである。高田氏は診療所の看護師長のことを引用し、病棟看護師のまなざしと患者との関係性が地域に出たときどのように変化していったかを紹介した。かつて、病棟で患者は「してもらう人」であり、看護師は「してあげる人」というように、両者の関係が固定されていた。ところが、地域に出ることで、患者は観察・管理の対象ではなく、患者と看護師との関係は同じ場所で、同じときを過ごす「一人の人間として対等な関係」であることに気づいていったのである。

それは、端的に言えば、地域で医療を展開する際に、専門家は退院した患者の「病気や問題を見るのではなく、暮らしを見る」「その人の生きてきた全体を見る」という構えを身に着けることの重要性に気づいていくプロセスであった（発表スライド；高田 2017）。このことを指して高田氏は「スタッフの脱施設化」と称したのである。

高田は、こうした専門家の構えをイタリア精神医療^{（注6）}の専門家の言葉を引用し、日本の施設型精神医療（施設化）のあり方と対比させて説明している。イタリアは1970年代に精神科病院を解体していった経緯があり、地域精神保健福祉のもと、たとえ重症患者であっても当事者は入院ではなく地域で暮らすことを可能にしている。患者と専門家との関係は、日本の病院では施設化された関係性（患者は観察・管理の対象）だが、イタリアでは「インフォーマルな関係性」とであるとする。患者は、病院では「患者という役割」に対して、イタリアでは「全体性としての人間」として位置づけられる。患者の社会的ネットワークとの関係は、病院では最小限にとどめるに対して、イタリアでは社会的ネットワークとは切り離さない、というものである（発表スライド）。

こうしたイタリア精神医療のあり方を一言で言い表せば、「歓待」という態度で示されるという。臨床哲学者の鷲田清一によれば、「歓待」とは、自らを切り開き、自分を他者に差し出すこと、言い換えれば、他者を目の前にして自分が何かに帰属することへのこだわりを捨てることで成立する態度のことである（鷲田 1999）。つまり、「歓待」^{（注7）}を意識する専門家にとって、地域に生きる患者は「患者という役割」ではなく「全体性としての人間」となり、患者との関係性は人間と人間との関係という「インフォーマルな関係性」になるということである。それには、専門家自身が身に着けている鎧や固定観念を覆す（される）覚悟が必要だということだろう。イタリアの精

神医療を研究する人類学者の松嶋健は、イタリアでは精神保健センターで利用者を最初に受け入れることを「歓待」と呼び、精神保健の活動が地域で行われるためには、地域自体が「歓待」の場になっていなくてはならないと指摘する（松嶋 2014：374）。地域には「歓待」という構えを専門家に要請するさまざまな仕掛けがあると思われる。なければ、そうした仕掛けを、菅原氏のように作っていく必要があるだろう。

さて、高田氏の報告のタイトルは「専門家が変われれば地域が変わる」である。専門家と地域がどこでどのように関係しているのだろうか。高田氏の報告から筆者なりに3つの観点から解説してみよう。第1点は、当事者が地域で暮らすことを支える支援者（専門家）の構えである。専門家としてわきまえのある専門性をもつことである。専門家が「歓待」の覚悟をもって当事者を支えるならば、当事者の暮らしが変わり、これまでの当事者との距離や時間の限界が変わることになる。すると2点目、当事者との関係が変わる。治療の場ではなく暮らしの場を起点とすることから、病気や障がいを超えた地域住民との間で交流が生まれる。当事者は「してもらう人」ではなく、地域での役割をもち、地域に貢献する人にもなる。その結果、第3点として、地域の人の病気や障がいに対する見方が変わるということである。つまり、「専門家が変われれば、地域が『歓待』の場になる」と言い換えることができよう。さらに、「地域が変わる」ためには、地域住民の側に立ち、地域の魅力を発見する視点が大切であり、それには研究者や地元の宗教者との連携が重要であるということである（発表スライド）。

まとめれば、支援者（専門家）の構えが、当事者の地域での暮らしに影響を与え、それが地域住民の価値観や考え方にも大きな影響を及ぼすということだろう。したがって、地域で医療を展開しようとする支援者は、自らの構え（覚悟）と実践が地域づくりになるかどうか、常に吟味しつつ、専門家としての役割を探求しなければならない、という主張である。

(3) 「あなたがいて良かったと思える街づくり：乳児院・児童養護施設の取り組みから」 （曾我幸央氏）

曾我氏は、30年近く相模原市で児童福祉に取り組んでいる専門家である。現在の相模原南児童ホーム（以下、児童ホーム）は社会福祉法人中心会のもと2014年に設立し、曾我氏は設立当初から施設長として地域の子どもたちの福祉に取り組んでいる。2016年10月現在、定員22名の乳児院と定員45名の児童養護施設を併設しており、小規模グループケアを基本にしている。社会福祉法人の理念は、「私たちは、私たちの使命を実現するためには、私たちが、私たちの活動する地域社会に根を張り、地域社会を育

てるとともに、地域社会に支えられるという、協働の精神を重んじるべきであると信じます」というものである（発表スライド）。



写真1 曾我氏の報告

入所している子どもの日常生活の支援はもちろんであるが、法人の理念を実践するために、地域住民を巻き込む取り組みを数多く実践している。例えば、月一回の「親子サロン」を開催している。親子サロンでは弁当の持ち込みが可能なことから、終了後もインフォーマルな交流がなされている。必要なときには専門家の協力を得て、個別の子育て相談も行っている。また、ベビーマッサージの教室、布おもちゃで遊ぶ教室や歌のお兄さんと一緒に踊る教室など、親子で参加できる場を用意している。さらに、参加費無料の地域の親子を対象とした映画鑑賞会を年3回開催し、30人から40人の参加者を集めている。これら以外にも、英会話教室、ヨガサークル、ジャズダンス、フォークダンス、フラダンス、サッカークラブなどに会場を提供したり、雨天時の遊び場や学習の場として地域交流室や会議室等を提供している（発表スライド）。

2016年から、生活困窮者の支援として「かながわライフサポート事業」に取り組んでいる。この活動は、大阪府や埼玉県、熊本県など、他県でも取り組む社会貢献事業の一環である。報告では2つの事例が紹介された。一つ目は、社会福祉協議会から、3世代（80代母、50代息子、30代娘）同居の家庭で「今日食べる物が無い」という状況に対してライフサポートを求める相談があった。まずは、食事支援とライフラインを止めないよう支援し、最終的には息子の就労支援をおこなったという報告である。もう一つは、市役所から、父子家庭（30代父、7歳長男、4歳長女、2歳次女）で、父親に就労意欲がなく、親子で引きこもっている状態に対して、父親の就労支援を求める相談があった。まずは、引きこもりの原因となっている実父の対人関係の不安を取

り除く支援を行い、その後就労支援を行ったのである。他にも、ひきこもりにある人、仕事のブランクがある人、コミュニケーションが苦手な人、障がいを持っている可能性のある人、育児や介護で短時間しか働けない人、などへの支援を行っている（発表スライド）。

さて、児童ホームが「地域をつくる」協働に参加しているもう一つの例として、筆者もかかわっている〈サンタプロジェクト・さがみはら〉というボランティア活動について簡単に述べておこう。〈サンタプロジェクト・さがみはら〉は、さまざまな理由でクリスマスに家族と過ごせない子どもたちに市民が絵本を贈るという、ボランティア活動である。2012年から始まったこのプロジェクトは、当初、相模原市の相模原協同病院の小児科病棟に入院している子どもたちを対象としていたが、より多くの子どもたちに絵本を届けようということになり、2014年から児童ホームの子どもたちに贈ることになった。曾我氏によれば、児童ホームの子どもたちの9割が家庭内虐待の対象であるという。家族がいても、自宅では暮らせない子どもたちである。

このプロジェクトの精神は「こころの贈り物（Gift of Mind）」「手から手へ（Hand to Hand）」というものである。地元の書店の協力のもと、病院と児童ホームと市民をつなぐ黒子的役割として学生ボランティアがいる。プロジェクトの趣旨に賛同した客は、学生の手作りカードに記載されている性別と年齢から、贈りたい絵本を書店の棚から選び、匿名のメッセージを添えて購入する。絵本を購入した証に、手作りのサンタクロース認定証をもらう。学生たちが書店で絵本を回収し、病院と施設に贈り届けるという活動である。ちなみに、2016年度は病院に22冊、児童ホームに91冊届けることができた（大学HP参照）。

児童ホームでは、学生たちが子どもたちの住まいに訪問し、子どもたちに直接絵本を届けている。無邪気にはしゃぐ子や照れくさそうな子、ゲームに夢中で無視している（ようにみえる）子、職員に促されて受け取る子など、子どもたちの反応はさまざまである。それでも、子どもたちの笑顔との出会いは、活動に参加してよかったと実感できる瞬間である。その後、学生たちは子どもたちのお礼のメッセージをもらい、気持ちの交流を行っている。

子どもとの交流から、学生たちはいくつかの気づきを得ている。一つは、家族と暮らせない子どもたちの存在を知ることができたことである。次に、病院や児童ホーム、そして書店（現在4つ）との直接的かつ間接的な交渉を学生自身が行うことで、働く現場の一端を垣間見ること、地域社会での現実を知ることができたことである。そして、なによりも重要なのは、学生自身が「地域をつくる」ことができる、その一端を

担っていることを実感できたことである。

(4) 参加者とのディスカッション——ワールドカフェから

シンポジウムの後半は、ワールドカフェ方式の総合ディスカッションを行った。ワールドカフェとは、参加者がリラックスしてオープンに生成的な話し合いが行えるように、4人から5人ほどのグループをつくり、カフェのような空間で創造性に富んだ対話を行うことを目的としている（ワールドカフェHP参照）。

ワールドカフェ全体のテーマは、シンポジウムのサブテーマ「わたしたちにできることは？」を採用した。グループでのサブテーマは登壇者の報告に関連付けて、A「ほけてもいい地域社会とは？」、B「専門家の役割とわたしたちの役割」、C「地域で子どもたちを育てるとは？」、D「どうつくる？地域のつながり」に設定し、各テーマで2グループ、合計8グループを構成した。1ラウンドを20分とし、2ラウンド目には異なるテーマのグループチェンジを行い、最後にテーマごとに全体発表をしてもらった。各グループのファシリテーターは、登壇者や市民、学生など、多彩な人が担当し、老若男女、多世代間で活発に意見が交換された。



写真2 グループディスカッションの様子

A「ほけてもいい地域社会とは？」では、「だれでもが老い呆けるのだから、それを受け入れて地域全体で見守っていく社会をつくる。それには、高齢者も地域に出ること、多世代交流をつくること、子どもの役割とお年寄りの役割をつくること、認知症に対して正しく理解すること、当事者の気持ちを大切にすることが必要だ。一方的な支えではなく、迷惑をかけあうこと、『おたがいさま』の関係が大事、近所づきあいや特別なことではないつきあいが安心につながる」等の意見が交換された。

B「専門家の役割とわたしたちの役割」では、「専門家って上から目線。専門家は

専門知識を持っているので、正しい知識の提供者であり、テキパキと仕事をこなし、素早い判断ができる、わたしたちを助けてくれる存在。でも、それが本当の役割だろうか。信じる、認める、待つことも大事だ。わたしたちもある程度の知識を持つことで、病気や障がいに対する偏見がなくなる。わたしたちにできることは、あいさつとかふだんの付き合いや居場所をつくること。専門家は自身が機嫌よくいられること、笑うことが大事」等の意見が出された。

C「地域で子どもたちを育てるとは？」では、「子育て中の母親は相談先がわからないので情報を開示してほしい、地域に出て近所であいさつすることで顔見知りになれる、地域でのイベントに顔を出すことが大事。でも、そのつながりを継続することは難しい。電車の中のベビーカーが迷惑、保育園の建設に地域が反発という現実がある。マンションでは自治会加入率が50%だという。子育て中の家に近所のおばあちゃんが来てくれるといいが、それがおせっかいとみられる可能性もあり、その距離感が難しい。子どもの遊び場や居場所について、うるさければ学校や保育園にクレームを言うのではなくて、子どもに直接注意してあげる方がいい。会社に子どもを連れてきてオフィスの中で遊ばせる、という企業の取り組みもある。『見守る』というのは、あいさつする、しつける、叱るという行為も含まれる。児童施設を利用する子どもに対する偏見があるが、ボランティアに参加し、子どもを知ることによって理解につながる。地域の子どもが幸せになれば、大人も幸せになる」等、活発に意見交換がなされた。



写真3 C「地域で子どもたちを育てるとは？」の全体発表の様子

D「どうつくる？地域のつながり」では、「地域のつながりは、ご近所さん、サークル、子ども会、学童の会、同級生のつながり、馴染みの店、自治会、保護者会など、身近な関係性でできる。自分が困ったとき、他の人とつながるきっかけになる『つなげる人』の存在は大きい。自分が住んでいる、自分が地域とつなが

ているという自覚が大事。自分は参加していないけど、家族が関わっているところを見る。仕事をしている世代が地域にどうかかわるのか、施設の利用者や障がいを持つ人を地域の一員であることを実感するためにはどうすればいいのか、が課題。今日自分が行く場所があること、自分が安心できる地域をつくること、脱病院化、脱施設化のまなざしで地域を見ること、一緒に暮らせるコミュニティをつくるのが大事」等、意見が出された。

全体を通して、参加者にとって「地域をつくる」とは「開かれた地域を模索することであり、待ちの姿勢よりは自分から働きかける」「その働きかけは特別なことではなく、さりげない、身近な『おたがいさま』の関係をつくる」ことであり、さらに「支援される側の主体性を尊重する」「支援される側にも支援する力がある」「地域のよい形を実現するためには様々な仕掛けが重要」等の気づきが得られたようだ。

なお、アンケート結果によれば、ワールドカフェ方式の導入については、初体験の参加者が多かったが、おおむね好評だった。一般的なシンポジウムでは、参加者は質疑応答の機会はあるけれども、全員が質問できるわけではない。自分以外の参加者が何を感じて何を考えたのかを知る機会がほとんどない。終了後、講演会が良かったのか悪かったのか、どこが良かったのか、悪かったのか、だれかと話したいという思いをだれもが抱いたことがあるだろう。こうした参加者側の思いを解消するために、ワールドカフェ方式を採用したのである。

3 「地域」に着目する意義

キーワード「地域をつくる」について、学術的にどのような意義があるのか、ここでは人文社会科学の議論を参照しながら考えてみたい。「地域」を学術的に考える際に、「地域」の近接概念として「地域社会」「地域コミュニティ」「地域共同体」という言葉がある。これらの概念についての議論は、多くのほかの概念と同様歴史的に変容していくものである。社会学でも人類学でも多くの議論を喚起するテーマであるが、議論をひもといていくと興味深いことがわかる。

まず、「地域社会」の「社会」であるが、その「社会」の形容詞で「社会的」を意味するフランス語の「ソーシャル」という言葉がある。歴史社会学者の市野川容考によれば、「ソーシャル」とは、「既にあるものとしての社会」を意味する名詞形の「社会」とは対照的に、平等や連帯という価値を志向し、流動的で人々の多様な結びつきを含

意する言葉であるという（市野川 2006）。

そもそも、19cヨーロッパにおいてフランスやドイツの憲法の条文を見ると、国家とは「社会的な国家」を意味し、平等や連帯という価値を志向する規範概念を含意する「福祉国家」を意味していた。ところが、日本に「ソーシャル」が入ってきたとき、規範的、福祉的なニュアンスがはぎ取られ、制度や国家と直につながる客体としての「社会」を意味する言葉に翻訳されてしまったという（市野川 2006）。ヨーロッパ型福祉を参照枠としている日本が、「国家とはそもそも福祉国家である」という前提を継承してはいなかった、という事実は気にしておく必要があるだろう。

こうした歴史的経緯を踏まえ、ヨーロッパの人類学研究では「ソーシャル」という語は、名詞の「社会」に比べて、人と人とのつながりについての多様なあり方や流動的なあり方を包摂する語として捉えることができるという。現代の複雑な社会の中では、人と人との関係性を基盤に置いた「ソーシャル」の構想が重要であり、改めて「ソーシャル」を構築することが提案されている（森 2014:7）。さらに人類学者の森明子は、「ソーシャル」という語を経由して、他者とのコミュニケーションやケアの関係がつくられていくと述べている（森 2014:7）。これは、後述する「地域」を構成する要素、社会関係やネットワークに接続する概念である。

また、「地域コミュニティ」の「コミュニティ」は、これは日本語では「共同体」と一般的に訳されている。議論の発端は「社会」のあり方を「ゲマインシャフト」と「ゲゼルシャフト」とに二分して社会生活の根本問題に取り組んだ19世紀末のテンニエスの議論に遡ることができる。テンニエスによれば、「ゲマインシャフト」とは、有機的形成物としての伝統的共同体、対して「ゲゼルシャフト」とは機械的形成物としての市民社会における特徴であると述べている（テンニエス 1990）。

両者を対比すると、ゲマインシャフトは「信頼に満ちた親密な水入らず」の持続的な共同体であり、家族、農村生活の地縁、血縁関係などにみられる関係性である。それに対して、ゲゼルシャフトは「公共生活であり、世間」であり、一時的な外見上の共同体であり、企業や都市生活における関係性の特徴として位置づけられている。前者は古く、本質意思、必然的な関係、後者は新しく、等価交換的な関係、選択意思…等である（テンニエス 1990）。

つまり、「コミュニティ」はゲマインシャフトの特徴を有する伝統的共同体としての意味が付与されてきた。そして、地縁、血縁関係などによって有機的に結合する集合体として捉えられてきた。「現代社会は家族の絆や地域のつながりが弱体化している」という捉え方は、ゲマインシャフト的な関係が薄れているということの意味して

いる。したがって、ここでの「地域」は「伝統的共同体＝コミュニティ」により近いものとしてイメージされているといえよう。

ところが、その後人文社会科学ではこれらの二分された概念を実体化してしまうことの危険性が指摘されている。都市社会（市民社会）と伝統的な田舎社会（コミュニティ）という二つの区分は分析のための方便であり、実体として分けられるものではないという議論が、近年展開されている。人類学者の吉岡政徳によれば、南太平洋の都市では、市民社会として捉えられてきた都市の生活に、ゲマインシャフト的な要素が入り込んでいるという（吉岡 2016）。その状況を指して、吉岡はゲマインシャフト都市と呼んでいる。したがって、都市であろうが田舎であろうが、ゲマインシャフト的な関係とゲゼルシャフト的な関係というのは共存しており、違いがあるとすればそれぞれの重点の置き方の違いといえるだろう。

また、「地域社会」を論じる際に、都市か田舎かという二者択一的な発想を退けた人類学者の阿部年晴は、「地域」を都市か田舎かという地理的な違いで論じるのではなく、人と人との関係性、ネットワークの作り方を通して「都会的なもの」と「田舎的なもの」をあわせもつ「地域コミュニティ」を構想する方向性について考察している（阿部 2014）。大都市東京の近郊で出版社を創業した一人の編集者を軸に、PTA、自治会、青少年育成会、特別支援教育ネットワーク、同窓会、祭りの会、地域文化研究会、歴史を学ぶ会、ロータリークラブなど、さまざまなボランティア的な地域活動を展開していくプロセスを追うことで、「地域に生きる」とはどういうことかを考察している。そこで、強調されるのは、「地域社会を創る」基盤となるのは、地域ネットワークの多面性や多層性が重要な要素であるということである。

「地域」を構想する際に重要なのは人と人との関係性であると1で既に述べたが、地域ネットワークの特徴（多面性や多層性）を具体的事例として示したのが登壇者3人の報告である。藤沢市のUR住宅で認知症高齢者の小規模多機能ホームに取り組んでいる菅原氏のように、「地域」における社会関係が機能していくためには、その人と人との結びつきを再び創るか、新たに創っていく仕掛けが必要である。また、地域ケアにおける専門家の役割とは何かを問い続けている浦河町の高田氏のように、地域に根ざしたケアをつくる際には、専門家自らが生活者としての視点を保持すべきであり、生活の場から、地域で暮らす自分が地域の人たちとどう暮らしの場を創っていくかを出発点にすることが肝要である。そして、さまざまな理由で自宅で暮らせない子どもたちの育成に携わる相模原市の曾我氏のように、保護者が子育てをできないならば、地域の人たちを巻き込み、地域全体で子育てに取り組むようなシステムや仕掛け

が必要なのである。

現代社会で「地域」に着目し、「地域をつくる」ために実践している現場からの報告をシンポジウムで共有することは、人文社会科学における地域社会論を精査していくためにも意義があるといえるだろう。

おわりにかえて ——「ひとごと」ではなく「じぶんごと」として

「地域をつくる」人とは、1で既に述べたように、医療・福祉の専門家だけでも、行政関係者だけでもない。基本的には、わたしたち一人ひとりが「地域を創る」当事者なのである。シンポジウムの目的は、参加者全員で「ひとごと」ではなく「じぶんごと」として、「地域をつくる」ためにわたしたちにできることはなにか、ということを考えることであった。

3人の登壇者は、それぞれの実践の現場で「地域をつくる」さまざまな取り組みを紹介した。それを聴いた参加者は、ワールドカフェでそれらを参考にしながら、自分の暮らしている地域と比較し、感じたこと、考えたこと、わからないこと、聞いてみたいことなどを共有した。

これまで、福祉の領域で行われていることを一般の人たちが論じる機会はそれほどなかった。また、福祉の問題は福祉の専門家に任することが当たり前だった。けれども、今回のシンポジウムを通して、自らの生き方や自分の住んでいる地域を再考するきっかけとなった人が少なからずいる（アンケート結果）。「地域」という言葉が、身近になった瞬間である。そして「地域で生きる」とはなにか、ということを考えることが、これからの「自分の生き方」を考えることでもあると発見できた瞬間でもある。その人にとって、自分が暮らす「地域」が新たな姿として立ち現れてくるに違いない。

「地域をつくる」取り組みに共通しているのは、「ひとごと」ではなく「じぶんごと」として考えるという視点である。「地域」を構想するために、「地域」を客観的に既にあるものとして存在する客体ではなく、そこに暮らす人たちが互いに働きかけ、不断の営みとしての関係性を構築するプロセスとして捉える視点が重要なのである。「地域をつくる」ために、一人一人が自分にできることは何かと問いかけながら。

【注】

- 1) 本学の社会福祉士課程に関する概要は、特集の他の論考を参照されたい。
- 2) オルデンバーグはアメリカの都市社会学者の一人であり、「サードプレイス（第三の場所）」という用語を「インフォーマルな公共生活の中核的環境」という意味で使っている（オルデンバーグ 2013）。アメリカの居酒屋やイギリスのパブ、フランスのカフェなどが例として取り上げられている。日本語では「居場所」という語が当てはまるようだ。オルデンバーグによれば、かつて地域社会で普遍的に機能していたサードプレイスは、都市開発によるゾーニングや高速道路の拡張化、娯楽施設の大規模化、労働時間の長期化など、産業社会の発展によって失われつつある。しかし、サードプレイスは単に家庭や職場を補う場所としてではなく、人が人として、またコミュニティがコミュニティらしく機能するための不可欠な場所である。
- 3) グルントヴィーの思想は日本では大きく二つに分かれて導入されたといえる。グルントヴィーが提唱したデンマークの国民高等学校と同じ名称の「日本国民高等学校」が1927年に茨木県に設立された。しかし、内容はグルントヴィーの思想の真逆をいくもので、国家に奉仕する有料農民養成のための学校で国主主義的な色彩を帯びたものであった。一方、キリスト教主義の国民高等学校である「日本農民福音学校」が設立され、グルントヴィーの精神を継承していたという（野村2010：171）。さらに興味深いことに、社会福祉学者の野村武夫は、グルントヴィーの思想に共通する人物として「知的障がい児の父」と呼ばれた糸賀一雄を紹介している。ともに「対話による相互作用」によって「互いに人間成長を遂げる」ことを教育の根幹に置いている（野村 2010：174-176）。
- 4) 日本の精神医療の特殊性は、入院型治療と長期入院に現れている。欧米諸国が1970年代に脱施設化（地域精神医療への道）を目指したことに比べて、日本の精神科病院の数と病床数の多さ、そして入院期間の長さは、いまだずば抜けている。たとえ、精神科病棟を廃止しても、他の精神病院に転院させることが当たり前となっている日本で、浦河町で転院させずに、地域で暮らすことを選択したことには大きな意味がある。このことについては別稿にて詳しいので参照されたい（浮ヶ谷 2017）。
- 5) 〈カフェデモンク・えりも〉とは、2015年8月から毎月一回えりも町で開催されているカフェのことである。えりも町の住職と診療所の高田氏とが設立したものであり、近隣区域の精神障がいの当事者や引きこもりの若者を中心に、行政の保健師や医療福祉の専門家、宗教者、ボランティアなど、多種多様な立場から集まってくる。そこは、参加者が自由に飲食しながらだれとでもおしゃべりのできる場所（サードプレイス）となっている。〈カフェデモンク〉の発祥は、東日本大震災の被災地での宗教者の傾聴活動に遡る。詳細については別稿を参照されたい（浮ヶ谷 2016）。
- 6) イタリアの精神医療とは、注4）で触れたように、精神医療の脱施設化を成功させた欧米諸国のなかでも顕著な例である。イタリアでは、精神科医のバザーリアを中心に北部イタリアから精神科病院を解体していった。そのために精神科病院はなくなり、精神保健センターに一時的な入院環境としてわずかな病床数があるだけで、精神科の患者はすべて地域に出ていき、そこで暮らすことが可能になった。脱施設化を実現する法が、通称「バザーリア法」と呼ばれるものである（松嶋 2014）。日本では、社会福祉法人〈浦河べてるの家〉と高田氏や診療所スタッフの地域精神医療の取り組みがイタリアと比較参照されることが多い。

- 7) 人類学における他者理解とは、他者を自分にとって理解可能な存在に変容させるのではなく、自らを変容させて他者と同じ地平に立つことで成り立つとされている。「歓待」という精神医療の専門家が求められている構えは、自らを変容させることから他者理解の道が開かれるという人類学の思考と重なっている。

【参考文献】

- 阿部年晴, 2014, 『地域社会を創る——ある出版人の挑戦』さきたま出版会。
- 市野川容孝, 2006, 『思考のフロンティア 社会』岩波書店。
- 神保康子 (構成), 2016, 「一市民としての当事者意識と覚悟が地域を変えていく」『訪問看護と介護』Vol.21, No.7
- 松嶋 健, 2014, 『プシコ ナウティカ——イタリア精神医療の人類学』世界思想社。
- 森 明子, 2014, 「ソーシャルなるものへの関心とヨーロッパ人類学」森 明子編, 『ヨーロッパ人類学の視座——ソーシャルなものを問い直す』世界思想社。
- 野村武夫, 2010, 『「生活大国」デンマークの福祉政策——ウェルビーイングが育つ条件』ミネルヴァ書房。
- オルデンバーク, レイ, 2013 (=1989), 『サードプレイス——コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』忠平美幸訳, みすず書房。
- 高田大志, 2017, 「スタッフの脱施設化」小林 茂・佐藤さやか共編、伊藤順一郎監修『病棟に頼らない地域精神医療論』金剛出版 (近刊)。
- テンニエス, フェルディナンド, 1990, 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト——純粋社会学の基本概念 (上)』杉之原寿一訳, 岩波文庫。
- 浮ヶ谷幸代, 2015, 「『生活者』が医療をつくる」『人間社会研究』相模女子大学人間社会学部, 第12号, pp.13-24。
- , 2016, 「『暮らしの場』を再構築するケア——東日本大震災の被災者の苦悩に寄り添う〈カフェデモンク〉の活動から——」『相模女子大学紀要』VOL.79, pp.25-39。
- , 2017, 「日本の精神医療における『病院収容化(施設化)』と『地域で暮らすこと(脱施設化)』——北海道浦河赤十字病院精神科病棟の減床化と廃止の取り組みを中心に——」『国立歴史民俗博物館研究報告』[共同研究]「民俗儀礼の変容に関する資料論的研究」第205集 (近刊)。
- 鷺田清一, 1999, 『「聴く」ことの力——臨床哲学試論』阪急コミュニケーションズ。
- 吉岡政徳, 2016, 『ゲマインシャフト都市——南太平洋の都市人類学』風響社。

【引用ホームページ】

- 厚生労働省HP 地域包括ケア研究会報告書 (平成25年 3月)
http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureissha/chiiki-houkatsu/dl/link1-3.pdf (2017/01/09access)
- 相模女子大学HP : <http://www.sagami-wu.ac.jp/> (2017/01/12access)
- ワールドカフェHP : <http://world-cafe.net/about/> (2017/01/09access)